
二本柱

くまごろー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二本柱

【Nコード】

N8553C

【作者名】

くまごろう

【あらすじ】

流れ大工の源次はわらじを脱いだ親方ところで娘のお花と恋仲になった。二人にいつしよになれない事情が発覚した。

一 流れ大工

……どこで仕上がった者か知らねえが、胸のすくいい仕事をするじゃあねえか……。

上棟式を済ませた柱ばかりの榎本邸の床を一人で歩きながら、富三は源次が鉋かんをかけた柱の一本一本に節くれだった手を這わせては顔をほころばせた。素性を確かめて、二年ばかり様子を見てからと思っていたが、源次の将来を見込んでお花の婿にしようと腹を固めた。源次が富三の下で働くようになってまだやっと一年だ。

……少し早えが、あいつが岡場所なんぞに通い出さねえうちに祝言を挙げさせてえ。立派に跡を継いでくれるに違えねえとも。この富三さまも孫の顔が見たくなったか。焼きがまわったもんだな、ふふ……。

器量よしで評判のお花の顔に、役者のような源次の顔を重ね合わせて、富三は自分の孫の顔を想像してみたが、どうにも大人の顔しか想い浮かばず苦笑いした。

しかし、源次を跡継ぎにする計画は同時に大胆な賭けでもあった。職人の世界でも名前と顔が知られてやっとな仕事になる。親方の顔は信用そのものだ。得体の知れない流れ者に跡を継がせる非常識などあり得ない。築き上げた身代を一瞬にして失いかねない馬鹿なことだ。

……でもよ、腹さえ決まりやあ道が開けねえもんでもあるめえ。なに苦労は覚悟の上だ……。

富三は亡き寅五郎師匠にならえばいいと樂觀した。

火事の多い江戸はそれだけ焼失した家を再建しなければならない。

大工・左官が多く江戸に流入した。親方衆はその必要から流れの職人を雇った。小僧から仕込まなければならぬ弟子とちがつて、必要になれば雇い入れ不要になれば解雇できる便利な臨時雇いだ。職人は腕さえあれば、出身地・前職・家族関係などは問わない慣しだったから、怪しい者も当然混じっていた。彼らは親方の所に草蛙わづを脱いだ客分の扱いである。流れ職人は一代限り、どれほど必死になろうが弟子を持てる親方になる道はない。身分が保証されない代わりに労働条件は良かった。実入りのいい流れ大工は羽振りがよく遊ぶ者が多かった。『守貞漫稿』もりさだまんこうという当時の世情を記した本に、朝出居残りさでいのこ（早朝出勤と残業）をやると大工の手間賃は「平日大略銀五匁或は五匁五分」とある。銀の換算が厄介だが、大雑把には三日で一分、一両も半月で稼げることになる。棒手振ばてふり（天秤棒で荷を担いで売り歩く商売）の約五倍、一年を働きづめで二両に満たない下男下女もいたのだから大工は高給取りだ。

職人と弟子を合わせて十三人を束ねている富三には息子がいない。跡目を継ぐのは弟子のうちからお花の婿を選ぶ以外にないのだが、職人に恵まれない。厳しく仕込んだつもりの弟子たちは腕も人の上に立つ才覚も源次になう者が一人もない。源次がやって来て、それまでなるようにしかならないと諦めに淀んでいた富三の心がさざ波だったのも無理からぬことだった。

源次には流れ大工らしいところがない。給金をもらえばすぐさま岡場所や賭場にすつ飛んで行くということもない。流れ者が棟梁の跡目を継げないのは源次も承知している。貯えをつくって何か商売の元手にしようとでも考えているのか。商売替えはおいそれと出来る時代ではない。

富三は源次ほど真面目で温和おとなしい流れ大工を見たことがなかった。源次は職人の間にも敵を作らないばかりか「源さんなら……」と言われるほど内弟子たちからの信頼も厚かった。富三が源次を選ぶのも自然な流れと言えなくもないのだった。

……源次は流れ大工だ。いつかは俺のもとから又どこかへ流れていく。弟子たちア源次を客分だと思ってるから騒ぎを起こしゃしめえが、いや待て――。源次とお花をいっしょにさせるとどうなるんだ？ 弟子どもはほめられた腕の無えどんぐりだ。抜きん出たやつがいねえ。お小夜のやつが跡取りを産まねえもんで、俺一代だとならずと諦めちやあいたが……。俺の作った俺の身代だ。婿を弟子から選ばうが余所から連れて来ようが俺の勝手じゃあるめえか。源次に流れ大工の足を洗わせるわけにやいかねえもんだろうか……。

富三は十年前に亡くなった寅五郎師匠を憶い出した。あれほど出来た人はなかったと男泣きして棺桶を担いだのもつい昨日のようだ。何かにつけて力になってくれて父親とも頼んでいた寅五郎の師匠が生きていたら、こんなときは知恵の一つも授けてもらえたらうになア。お菊と所帯を持ったときみてえに、源次を預かって仲間うちの信用をこさえてくれたかも知れねえ……。富三はすでに周囲に頼れる人物のいない年齢になっていた。

……あいつは俺の面^{つら}に泥を塗るようなことはねえ。飼い主の手を咬んで後ろ足で砂をかける性悪の流れ者じゃねえこたア判ってる。弟子どもなら給金を二割がた、いや一割五分も上げりや納得するだろうが、信用だけは銭で買っわけには行かねえからなア……。

二 源次の思案

ある日、源次がおずおずと富三の座る長火鉢の前に進み出た。

「親方、ちいとばかり話がありますんで……」

「なんだ？ 給金を上げるとでも？」

冗談めかして富三が言った。

「いえ、そんなんじゃねえんで……」

源次はにこりともしなかった。

「何でえ、その神妙な面あ？」

「どこの馬の骨とも知れねえあつしによくしてくだすつて、恩知らずは重々承知で、お願えがあります」

「……？」

「じつア近々暇をもらいてえんで……」

源次に上に立つ者の心得を教え込もうとしていた矢先だったから、富三には寝耳に水だった。頭がくらつとした。源次はわずか一年にして仕事全体の算段ができる立派な片腕だ。娘と添わせようと考えていることは一言も伝えてないが、お花のこたアどうするんでいッ、と口に出かかった。源次の身許が見通せるまではと慎重すぎたのがまずかったか。心が揺らぐのを気取られまいと富三は平静を装った。「暇ア取つて故郷にでも帰るか？ どこだったな、故郷は？」

「お察しでしょうが、あつしには帰る里なんぞねえです。素性のわからねえ流れ者を今まで本当にありがとうござえました」

「ふうん、で、これからアどうするつもりでい？」

源次は黙ってしまった。

……肝心なところ差しかかるとこれだ。源次のここだけは気に入らねえ……。

江戸の職人のしきたりで流れ大工の昔を根掘り葉掘りするわけにいかない。源次は本気なのか？ 出て行くつもりなら素性は明かすまい。先を考えれば素性は確かめなくてはならないが、お花を持ち出すのは考え直した。

……やっぱり何かあつた男なのか、いや、どんな過去があるにしても源次よ、俺の所じやおめえは歴とした大工じゃねえか……。

「口べただもんで、どうもうまく言えねえです……」

……借金でもこせえたか？ 博打をうつなんて聞いてねえがな。喧嘩でもしたか？ まさか大工が切った張つたはねえだろう。何なんだ？

客分の源次に強く問いただせない自分が齒痒かった。

「詳しいことは明日、銀造の親方がこつちに参りやすんで、そのと

きに聞いてやつておくんなさい」

源次は煙管きせるをくわえてむっとしている富三に、ペコリと頭をひとつさげると、内儀のお小夜が淹れた茶も啜らずにその場を辞した。

「銀造つて、左官の銀さんかい？」

お小夜が富三に訊きいた。

「俺も心当たりはあの銀の字だけだが」

「源さんが人を介してすることだから何かあるんだろうねえ」

「その何かてなア何だよ？」

「そんなこたアあたしに判りやしないやね」

富三と連れ添って長いお小夜には亭主の考えている大方は察しがつく。富三はお花のことしか頭にないからだ。

……ふたりを添わせようてんだろうけれど、あたしにやどこか引っ掛かるのさ。温和しいし悪い男じゃないよ。でも、お花とはうまく行かないよ……。

お小夜の勘だった。

翌る日、さつそく左官の銀造が訪ねて来た。

「じつアな、源公をもらい受けてえと思つてよ」

「そりゃあ、どういうこつたい？」

「いやア、うちのお房はお花坊より一つ上だから、もう十八になるがな、ここで急に色氣づきやあがつてさ。問い質してみりや、おめえんとこの源次にホの字だてえじゃねえか。お房もそんな年になつたかと思つたがよ、男と女のこつたからな、いずれはなるようにさせなきゃいけねえと、そういうわけだ」

「お房坊と源公は理わりねえ仲だてえのかい？」

「いや、そこまで行っちゃいねえ。でもよ、娘がその気なら親としちゃそれなりに動かなくちやなるめえからな、あつはつは」

富三は一瞬さを越されたかと思つたが、次の瞬間にはニヤリとした。

……急に色気づいただと？ 笑わせるな。お房は何度も仲條流（ちゆうじょうりゆう）墮胎専門医）の世話になつたてえ評判じゃねえか。源次だつてまさかおめえんとこのすれっからしに引つ掛かりやすまいよ……。

富三は、源次が来てからというものの、若い衆がどれも物足りなく見えて仕方がない。お花のためにも譲れない。長い釘を一本さしておこうと思つた。

「銀の字、ウチにもお花つて娘があるんだ。世間にそれとはつきり触れちゃあねえがよ、その辺はちつたア遠慮つてもんがあつていいだろうぜ」

「おうつと富三の旦那、そりゃねえやな。ウチのお房が先でいいいや、お花だつ」

四十も半ばを過ぎた大の男が言い争つた。

「銀の字、肝心の源公の腹がわからねえじゃ埒らちアあくめえ。でえいち、あいつは大工だ。今さら左官に鞍替えはまずねえだろうぜ」

富三は勝つたと思つた。

「あれ？ 源公には棟梁から暇をもらうように頼めと言ってやったがな。聞いてねえたア言わせねえよ」

富三はうつと息をつめて、昨日の何か言いたそうで言い切らない源次の態度を思い出した。銀造がことばを継いだ。

「おめえも俺も職人だ。年季が職人を作るくれえのことは知ってるでもよ、源公はちがうぞ」

「どうちがうつてんだい」

「棟上げのあと榎本邸に行つてみたかい？」

「いや」

「玄關脇の壁が実にうめえ具合に仕上がつててよ。不思議なこともあるもんだと留公に聞いてみるとよ、おめえんとこの源次がやつたてえじゃねえか」

「ウチの源公が左官のまねごとを？」

「まねごとじゃねえよ。左官が見よう見まねで出来るけえ。ウチの留や八にも出来やしねえよ。あれこさア天賦の才つてんだるなあ」

「……」

富三は思い出していた。源次はふらつとやって来て働かせてくれたと言った。しゅっと一気に手元に引いた鉋^{かんぼう}捌きに目を見張ったのが一年前だ。天賦の才か、そうだろうな。

「で、源公に話を聞いてみるとよ、左官の仕事はおもしろそうだと来たな。大工よりや左官のほうが向いているかも知れねえとな。源公はそう言っただぜ。ま、考えておいてもらおうか」

銀造は肩をいからせて帰って行った。

三 源次の生い立ち

思い通りにことが運べば腹を立てる者はない。富三は源次を呼びつけて怒鳴った。あてに出来ない者をあてにした自分にも腹が立つた。職人たちが弁当を使う昼時、お花が家から何か一品二品こさえては普請場に持ってくる。そのときのお花の眼は、源次の姿ばかり盗み見る惚れた娘の眼だったし、それは源次も同じことだった。流れ大工の立場を弁^{わきま}えて源次の方は隠しちやいるが、それこそ色に出にけりだ。……暇をくれたと？ お花が流れ者に遊ばれるのを指をくわえて見てる訳にやいかねえ。暇をやるわけにやいかねえ。

「やい、源公つ。てめえ一体どういう了見でえッ」

「勘弁してください、親方。どうもうまく言えねえですが、左官をやってみたくなったとしか言いようがねえんで。それに流れ大工が淀んじまっちゃあ親方に迷惑が……」

……大工のままなら親方はいいらを手放しちゃくれめえ。仕事を変わるとでも言わなきゃここに居つきりになる……。源次はそう考えていた。

「そんな浮気な、べらぼうな話があつてたまるけえッ」

そう言いながら富三は掌から玉の落ちる思いだった。

「源公、銀の字のこのお房坊のこたアどう思ってるい？」

「いえ、べつに何とも……」

「そうだろうとも。俺はお花もおめえもまんざらじゃねえと睨^{にら}んでる。どうでい、お花と所帯もって俺の跡を継いでみちやあ。この期に及んでおめえの氏素性は問わねえ。おめえの腕は確かだ。な、左官だなんてバカ言わねえで、そうしな」

富三は思いを一気に吐き出した。

「有り難え話ですが親方、それだけは勘弁してください」

「なにをつ？ 俺がただけ譲ってこんなことを言ってると思ってんだつ、ええ？ ちよいとひと塗りしたの左官にをほめられたくれないで何様のつもりでえ。銀の字はな、あの蓮っぱをおめえにくつつけてえだけだ。あつちにや跡取り息子があるくれえおめえも知つてようが。左官になったところでいいように使われるのがオチだつ」

「そりやわかつてますが、親方、人には出来ることと出来ねえことがあります。何事につけ潮時てえもんも……」

「なんだとつ、生意気なツ。お花を氣に入らねえとは言わせねえつ」

「お嬢さんを氣に入らねえなんてとんでもねえこつて。ただあつしにややらなきやなんねえことがありやす。お嬢さんと一緒になるわけにやいかねえです」

「源次、流れ大工にやちつとも歩の悪い話じゃねえ。てめえの一生より大事な話てえのを聞かせてみるいつ」

源次は観念したように声を低めて言った。

「……わかりやした。よござんす、一部始終を話しやす」

富三は源次の両の目にすでに涙が溜っているのが氣になった。

「もともとあつしが流れ大工になったのも人を探してのことなんで……。あつしのおつ母さんてえ人は旅回りの一座におりやした……」

旅回りと聞いて富三はびくつとした。富三の先妻のお菊は鶴屋菊之丞という水芸の芸人だった。……因縁でもあるのかな……。富三

は源次に親しいものを感じた。

「おつかさんは女義太夫だったです。若え頃やくざな男に騙されて父なし子を産みやした。へえ、あつしです。伊豆で婆さまに育てられやした」

「故郷は伊豆なのか」

「へえ、爺さまから勘当されたおつ母さんは、年に一度あるかなしかの伊豆興行には必ず訪ねて来たつてえますが、河原乞食に敷居は跨がせねえと家に寄せつけてもらえなかったてえこつてす。その爺さまが死んで、たった一人の身内になった婆さまが死ぬときに知らされやしたんで。へえ、おつ母さんのことをです。」

「源、お父つつあんなら恨んでもいい。でも、おつ母さんを恨んじやなんねえ。あんな女でも薄情なわけじゃねえんだ。爺さまに隠れておめえを抱かしてやったことがあつたが、そりやあえらい泣きよう喚きようだった」と。生き別れてえのは酷いもんです。二人まで不幸になることはない……婆さまはおつ母さんを蹴飛ばして帰したてえこつてした。

婆さまは爺さまの道具箱をあつし呉れやした。鉋、鋸、鑿、手斧、曲尺、墨壺、水縄、木槌——金物は錆びてやしたが一通り揃つておりやした。八つの子供にや道具箱は担げねえです。あつしは兎に角一人でおまんまを食わなにやならなかったんです。婆さまが頼んでおいた棟梁とここで修行しやしたんで……」

「源公、ちよいと待ちな。その伊豆の親方の名前は判るかい？ 喧嘩して飛び出したわけじゃねえならおめえは大工の筋だ。素性の知れねえ流れ者じゃねえよ。師匠から一筆もらえねえか？」

「あんまり理不尽に扱われたもんで飛び出しちやつたんで。面目ねえです。棟梁もこの世の人じゃねえでしょう」

「……」

「江戸なら稼げる、流れ大工ならおつ母さんを探せる——十五の頭にやそれつきりねえですから」

「無理やねえやな。で、おつかさんはよ？」

「見つかりやせん。なんせ雲をつかむような話で。それでも上野辺うえのりの小屋で見たとか見ねえとか教えてくれる人もありやして、見当をつけちゃあ探しちゃみやすが、やっぱり駄目だめで。なにぶん時が経ち過ぎてやす」

「気の毒によう、苦勞したんだな。で、それから手がかりはねえのか？」

「へえ。芝居小屋、見世物小屋はあらかた探しやした。残っているのはここいら近辺くれえなもんでやす。ここで手がかりがなければ、何処とは決めちゃいやせんが、また先へ……。いや、長逗留になっちめえやした」

富三は腕組みをし直して眼をつぶった。……決心は堅そうだが、話は最後まで聞こう……。

「上野、下谷、浅草と歩つて厩橋まで来ると、きれいな娘を見かけやした——親方のお嬢さんです。稽古ごとの帰りらしい娘さんが三人ほど笑いさざめいて往還をやつて来る。そのお嬢さんの姿にあつしは心の臓をつかまれたようにきゅんやりやしたんで。見たこともないおつ母さんに似ていたなどとは申しやせんが、何とも言えず気を奪ひわれて、引つ返してお嬢さんの後を尾おけやした。あんなきれいな女ひとを見て暮らせるなら、それも幸せだと思ひやした。決して不埒ふらちな気持ちからじゃありやせん。お嬢さんは家でなく、親方やお弟子たちのいる普請場に着きやした。あつしは渡りに舟とばかり、ここに草蛙を脱がさせてもらおうと決めやした」

「もう一年だな……」
「へえ……」

富三はありありと思ひ出せる。熊公が鉋かんを渡すと源次はチラと一目見て玄翁げんのうでけつを叩いた。外した刃を研ぎながら源次は熊に、道具はいいものを持たなきやいけねえ、と言ひやがった。流れ大工のはつたりだろうと思つたが削つた材木の面は鏡みてえだつたな。源次は熊の気を悪くさせなかつた。「腕のせいじゃねえんだから、親方にいい道具を奮発してもらいねえ。な、熊さん、そうしねえ」

富三は源次を見どころのある男だと思ったのだった。

四 お花の恋心

お花は、父親の仕事柄むさ苦しい男たちを見慣れていたところへ源次が現れて、妙な心地がしたものだ。源次は外で仕事をする男の顔ではなく羽子板に描かれた役者を思わせた。草蛙を脱いで早々に源次は男たちのなかで別格に扱われているようだ。お花は源次の小ざっぱりしたなりが気に入った。他の男たちのように無精髭ぶしやうひげが生えていることはないし、月代さかやきはいつも青々と剃られていた。首に掛けた手拭いさえ源次のものなら汗臭くはないだろうと思えた。お花の恋も始まっていた訳である。

勝手の明り取りの障子を開けると源次が引越して来たばかりの長屋が見える。源次は仕事から帰ると井戸端に出て、きつく絞った手拭いで上半身を拭った。そして、さっぱりした格好に着替えては出かけて行くのだった。

……何処へ行くのかしら……。

お花は気になって勝手の障子を細めに開けては源次の様子を窺うかがうようになった。しかし、源次より気になるのは、用もなさそうな左官屋の娘が長屋の前を行ったり来たりする姿だった。

……何よ、あの子。源次はウチの職人なんだからねっ……。

「ちっ、今日もだめか。まったく気が滅入るなア」

雨が二日つづいて降ったその二日目の朝、富三は恨めしそうに外を見て言った。朝からの雨で大工たちは仕事を休んでいる。

「お父つつあん、こんなときじゃないと骨休め出来ないんだから、気晴らしにおつ母さんを連れて芝居にでも行ってきたら？」

富三は仕事が気になるふうだった。

「たまにはおつ母さん孝行しなさいな。帰りにうなぎか天ぷらでも食べてさ」

ませた口をきくお花に、朝餉の後片付けをしながらお小夜が言った。

「まあ、出来た子だよ。有難いねえ。おまいさん、そうさせてもらおうよ」

「仕方ねえな、そうするか」

……うまく行きそうだ。後は内弟子におあしを持たせて髪結い床へ追っ払ってやればいい……。

お花はそうした。昼からは家にだれもいなくなった。勝手の障子を開けて長屋を見ると、源次が出かけそうな気配なのでお花は慌てた。

……今日こそ確かめなくちゃ……。

源次は決まって脇の路地を通って往還へ出る。お花は待ち構えた。

「お待ちよ。どこへ行くのさ？」

「へえ、ちよいと野暮用で……」

「そっちは野暮用なのね？ こっちは大事な用があるの。来てっ」

源次は勝手口から背中を押されて入った。

「何ですか、用というのは？」

「源次、上がって」

「へえ」

何か起こりそうな予感に源次は戸惑っている。

「左官屋のお房ちゃん、あたしは嫌いよ」

「はあ？」

「とぼけないでっ」

「お嬢さん、あっしには何のことやらさっぱり……」

「じゃ、お房ちゃんとは何でもないの？」

「あつはっは。何もありませんよ。何かあつたならこっちが知りてえくれえで」

「お房ちゃんがうるちよろしたり、家の中を覗いたりしてるのを知

らないの？」

「え？ 何のつもりだろう、いやな娘だな」

「ねえ、本当にいやな娘？」

「お嬢さん、大事な用ってそんなこつてすかい。あつしは野暮用がありますんで……」

「あ、源次っ。大事なのはこれからよっ」

お花が背を向けようとすると源次の手を取った。

「お嬢さん、いけやせん」

「源次はあたしを嫌いなのか？」

お花が小鼻を膨らませて、自分とよく似た源次の眸^めを見た。白く細い手は手首をつかんで放さなかった。源次は女の手がこんなに柔らかくしつとりと温かいものだとは思わなかった。

「嫌いじゃねえからいけねえんです。言わなくなつてわかるでしょう？ 身分が違いますよ。あつしはお嬢さんの顔が拝めりやそれで

……」

「いやよ、そんなのっ」

「こんなところを見られたらあつしは追い出されちまいます。それでもいいんですか？」

「源次の意地悪っ」

自制しようとの言い回しとは裏腹に、若い血が身体じゅうを駆け巡って源次は何も考えられなくなつた。お花の手にぐいっと力が入り、源次は納戸に引かれて入った。箆^{へら}や文机に挟まれたせまい空間に二人は倒れこんで重なり合つた。源次とお花に別世界が開けた――。身分の違いをかなぐり捨てて、恋心とそれを内に包んだ二つの肉体が溶け合う場所になつた。二人はここで片割れて淋しい自分の身体と心が相手のそれと一つになる歓びを何度も味わつた。納戸の中では世間のすべてを忘れることが出来た。目をつぶり鼻の頭に小さな汗の玉をぷつぷつと浮かべて、ふうふうと息を整えているお花を隣に見て源次は、お花のことを心底かわいいと思った。

……きれいな娘を俺はかわいいと思うのか。ふだんは父親をまね

てかぞんざいな口を利くが、黙っていりや近寄りがたいほど美しい娘だ。それを今、かわいいと思うのは――抱いたからか？ お花をてめえのもんだと思いやがったからか？ ええい、俺はもうお花が愛おしくてたまらねえ。でもよ、でも――俺はいつてえ何てことをしちまったんだ。ここにや居られねえぞ。流れて逃げるか？ でもよ、そしたらお花のこともいつか忘れちまって、今みてえにかわいいと思つたことさえ思い出さなくなるんだらう。かわいいと思えりや極楽で、きれいだと思つてもかわいいと思えなきゃ価値もねえだろつぜ……。

源次はお花をどこまでも可愛がつてやりたい気持ちと世間の掟を破つてしまつた悔いの板挟みになつた。

……お花は大した考えもなしに誘つたんだらうか。ひとまわりも上のおいらの方に分別がなつたのか。お花がしあわせそうなのが何故こんなにもうれいいのか。世間知らずな幼い寝顔が泣きたくなるほどかわいく思える。かわいいと思う俺はしあわせなのに、身分を考えるてえと自分のしでかしたことは恐ろしい人でなしの仕業だ。人でなしに身を任せて歡ぶお花はいつたい――？ お花が目を開じたまま源次に腕を絡ませてきた。かわいい――。

……身分か、ふん。俺は人の道を踏み外したんじゃないやねえ、素直に人でなしになつて女を一人歡ばせたんだ。世間から人でなしだ畜生だと呼ばれたつて構やしねえ。誰だつて人でなしのくせに世間体をつつ被つてるだけじゃねえか。俺アお花をかわいいと思つていてえ……。

源次とお花のふたりを乗せた舟はもやいが解けて岸边を離れた。

二日後――。

源次の出かける様子が見えて、お花は下駄をつつかけた。

「おつかさーん、忘れ物をしたから清元のお師匠さんのところへちよいと出かけて来るーっ」

お花は源次の後ろ姿をつけた。ずいぶん歩いて源次は下谷も上野に近い髪結い床に入つていった。

……海老床？ 源次はこんなところまで髪結いに来るの？ あれ、もう出て来た。え？ 今度は乾物屋……？。

源次は店に入って老婆と話し込んでいる。暗くてよくわからないが、椎茸^{しいたけ}、干瓢^{かんぴょう}、大豆^{だいず}、干鰯^{ほしだら}と妙なものを次から次へと買っている。…… いったい何しようてのかしら？ あ、出てくるっ……。

お花は仲良くなれて安心したものか源次が頻繁に外出する目的が知りたくなって尋ねていた。

「それはお嬢さんにはまだ教えられやせん」

「いや、二人きりのときにお嬢さんなんて。お花って呼んでっ」

「これは——俺にもおめえにも大事なことになる。わかり次第お花にはいの一^い番で教える、誰より先にな」

素っ気ない返事もお花にはうれしかった。源次が自分を「あつし」でなくて「俺」と言い、お花を「おめえ」と言ってくれた。源次との仲がどんどん近づいて深まって行くのが楽しくて仕方ない。それでも、まだ教えられない、と言われたのはやっぱり気掛かりで源次を尾行してきたのだった。髪結い床も乾物屋も色恋とは関係なさそうなのでお花は安心した。すると自分がハラハラしながら尾^おけて来たのが何とも馬鹿らしくなった。

…… かんざし的一本も買うならまだしもさ。でも、あのお婆さんとの話は買^かい物のようじゃなかったけれど……。

お花は源次といっしょに帰りたい気持ちをごらえた。…… 相手もないのに怪気を見せたとおつてはまずいものね……。源次の外出は自分とは関係のないと知ると、お花はほっと気も軽く田原町へ帰っていた。その後に源次が居酒屋を梯子したことをお花は知らない。

翌る朝、源次は普請場に姿を見せなかった。富三が不審におもつて弟子の一人を長屋に走らせたが、戻った弟子は、呼んでも返事がなく内側から心張^{しんは}りがかわれていて様子がわからないと言った。

「そうか……」

富三は昼休みまで待つて長屋に源次を訪ねることにした。

「おーうい、源公っ。俺だ、富三だ。開けろいッ！」

返事がない。

「おいっ、源次ッ。どうしたッ、何があつた？」

心張り棒をかつた障子はびくともしない。富三は胸騒ぎを覚えて障子を蹴破つた。とたんにひどい酒の臭いがした。上がり端に嘔吐物がある。一升徳利が転がっている。富三は源次に跨がつて両の頬に平手打ちを食らわせた。

「あ、あアーうい。あ、親方ア」

源次はようやくのことで腫れた臉を開けた。喧嘩をした様子もないので富三は少し安心した。

「ちっ、親方じゃねえよ、馬鹿野郎めっ」

返事とともに酒臭い欠伸をされて富三はムツとした。

「そんなになるまでなんで飲んだ？」

「……」

源次は、御免なすつて、も言わずにふらふらと立ち上り、富三を突き飛ばすようにして土間へ裸足で降りた。水がめに乱暴に柄杓ひしゃくを突っ込んで、ごくごくと喉を鳴らして立て続けに水を飲んだ。

……何があつたんだ、源次……。

「シャキツとして家に来いッ、今すぐだッ」

お小夜は酒臭さに顔をそむけて濃い渋茶を突ん出した。

「何があつたんだね？」

「……」

「お小夜ッ、俺から聞くからちつとだまっていねえ」

長火鉢の前に正座した源次の上体がぐらつ、ぐらつと揺らいた。

「親方ア、俺のこたアもうどうでもいいですよッ」

平素からは考えられない乱暴な口だ。余程のことがあつたのだろ
う。

「おつかさんがどうかしたのか？」

「死んじまつてやしたよ」

「そうだったか、そりゃあ……。どれほどか生きて会いたかつたろうによお」

富三は目にじんわり涙をにじませている。

「根岸から下谷の方へ出て、いつものように髪結い床で昔の小屋掛けの話をしてみてるってと、乾物屋のおきん婆さんてのが詳しいんで、その婆さんを訪ねて行きやした……」

「ああ」

「婆アが要らねえものを売りつたがるもんで、しょうがねえ、一品ずつ買っちゃあ話を聞き出すてえと、親方のことも喋りだしやしてね、この婆アが」

「俺のことをか？ その婆アが俺のことを知ってたつてのか？」

「ははは。あつしも話し込んじめえましたよ」

「俺のこたアいつ。おめえのおつ母さんの話はよつ」

……お人好しなだけでここまで心配はしねえ。いい人だな……。

源次の眼からばたばたと涙がこぼれた。

「乾物屋の婆アが言いやがつたんでさア」

「何て？」

「お嬢さんは親方とお内儀さんの子じゃねえ……」

富三は目の前が真っ暗になった。

「な、何を言い出しゃあがるんでいつ、源公ッ。糞婆アめ、どこまで喋りやがつたッ！」

五 お菊と富三郎

お花は先妻のお菊の産んだ子だった。

二十年前、富三は旅芸人一座のなかに水芸の花形鶴屋菊之丞を見初めた。小屋がかかっている間じゅう通いとおした。菊之丞もこの

熱心な客に関心を持って舞台から秋波を送った。明日は姿が見えなくなる千秋楽、菊之丞は富三を小屋の前で待つて紙切れを渡した。
「武州川越 六月十日ヨリ」

江戸にいちばん近い興行先と日程が金釘流で書きつけてあった。

……菊之丞が試しているなら馬鹿にでも何にでもなつてやるさ……。

「必ず行く」

富三は頷いて菊之丞の涼やかな眼をずっと見てうなずいた。

……川越なら一日だ。夜通し歩けば朝には着けよう。着かにやならねえ……。

蒸した日だった。梅雨時なのが有難かった。富三は師匠から二日の暇がもらえた。夜通し歩いて川越で菊之丞の顔を見て、また夜通し歩つて浅草田原町へ引つ返す。

若い二人は三月ぶりの再会をよろこんだ。

「親方からもらえた暇は今日だけだ」

「富さん、そこまでして……」

次の浅草興行は暮れになる。今度は半年先だ。

「半年の間、おめえを一時も忘れねえでいるぜ」

「そのときは富さんに芸人の真心を見てもらいます」

「菊之丞……」

「富さあん……」

とんぼ返りの富三を荒川土手に見送つて小屋に戻ると、座長がにやけた顔を見せた。

「菊之丞、相変わらずいい腕だな」

「そんなんじゃないよっ」

……そう、あんなに澄んだきれいな眼をした人はそうはいない……。

半年後——。浅草七軒町的小屋で富三は菊之丞に所帯を持とうともちかけた。

「あたしゃ嬉しいけど、そちらがそうは行かないでしょ？ あたし

らみたいに金でどうでもなるわけじゃないんだから」

菊之丞は一座の冬は伊勢だという。遠い。富三は居ても立っても
いられない。

「親方、あつしも伊勢詣りに連れてつておくんなさい」

「あつはつは、お伊勢さんまで行つて水芸を見るのか？」

「親方、何でそれを？」

「顔に書えてあるよ。まア待て。親方たちの集まりにおめえを連れ
て行くわけにやいかねえ。代わりに菊之丞を見て来てやるよ、あつ
はつは」

何か含みのあるような笑顔の師匠だった。

富三は世帯が持ちたかった。

江戸の庶民は自由意思で同棲するのが相場だとしても、そう簡単
には行かない。相手は芸人だ。富三を知る周囲から、浮草稼業の女
が富公の所に落ち着けるはずがない、これまでに例がない、旅芸人
なんぞはいい噂は聞かない、遠くなく棟梁になろうという男が芸人
の女房ではまずい、と口々に反対された。その中で師匠の寅五郎の
意見だけが違った。

「親方、皆はお菊が芸人だつてだけでなんで反対するんですかい？」

「おめえを心配してのことさ」

「さあ切れる、やれ別れるで、あつしの言い分なんか聞いちゃくれ
ねえ。それが心配だつてんですかい？」

「それなりに心配してんだよ。俺だつておめえが小僧の時分から預
かつててよ、やっと目鼻がついて来ようてえときだ。後々揉めるよ
うなことがあつちやなんねえと思う。周りもただ反対するのもしけ
ねえがな」

「何とか手はねえもんで？」

「こつから先ふたりの気持ちが変わらねえなら、手もなくはねえさ。
俺もおめえの性分はわかつてるよ」

「お願え致しやすッ」

富三は両手をついて頭を板の間に擦りつけた。

「菊之丞は俺の顔であずかつて女中奉公させる。二年だな。その後で後見になっておめえらを添わせる。会ってもならねえ口をきいてもならねえの二年を過ごしてからだ。どうだ、富よ、おめえにできるかい？ その気はあるかい？」

当時、身分の異なる二人が一緒になるには、受入れ側に信用を築かなくてはならない。土地の有力者や職人の親方などが身元を引受け、双方もしくは片方を地域から隔絶した環境で一定期間を過ごさせ、それを全うした者を受け入れる例はあった。

二人には寅五郎師匠の言う通りにする外に方法がなかった。有難いことだが一時たりともそばを離れたくないふたりには長い二年だった。座長に吹っかけられた出費のことと師匠は富三に何も言わなかった。老師匠は弟子に恥をかかせまいと親方衆を集めて披露めの席を設けた。二人が所帯を持つてからも、女房が芸人だったと蔑まれることがただの一度もなかったのは師匠のおかげだった。面子ばかりの親方だったならとうの昔に破門されていたろう。富三はどれだけ有難いと思ったことか。師匠のような親方になりたいと富三は心から思った。

菊之丞は大工の女房お菊になってお花を産んだ。お菊は甲斐がいしく立ち働いたし、出しゃばることがなかった。寅五郎師匠の下世話もした。町内で、人を身分や経歴やで見るものではないとお菊の評判が見直され始めた頃、長の旅暮らしが祟ったのか周囲に氣遣いする疲れが出たのか、お菊は床について三日目にあっけなく死んでしまった。今はの際に菊は、お花の先に男の子を産んだが、どこでどうしているとも知れないと喘ぎながら富三に告げた。

「お花を産めたのはうれしかったよ。ありがとよ、おまいさん……」
富三の恋女房は息を引取った。

今のお小夜は、しょげかえって腑抜けになった寡男おこいづちの男を見るに、見かねた年寄りたちが世話した出戻りで、器量も氣立ても十人並みだ。

富三はお花の他に子を欲しがらなかったし、お小夜が離縁された経緯も聞こうともしなかった。子を産まないかもしれない身体を恨めしく思いながら小夜は富三に尽くした。亭主がお花にかまけるのも内心、跡取りが欲しいのをごまかしているせいであろうと、子安神社でお百度を踏んだのも二度三度ではない。淋しい小夜には富三に嫁いで十五年が過ぎていた。

六 お小夜の嫉妬

お花はお内儀さんの子じゃない、との源次のことばに慌てて転ばした湯飲みを拾いながらお小夜が言った。

「まさか、ひよつとしてあんたはあの……」

「乾物屋の婆アが言いやしたんで……」その女義太夫なら、父なし子を産んでつから腹に力が入らなくなつちまつてね、評判落として水芸の太夫になったんだ。鶴屋菊之丞。そりゃあ、いい女だったさ……」

くつくくつ――。

源次は叫び出したいのを両拳を握りしめてこらえていた。

「じゃ、やっぱりおまいはお菊さんの……」

「どつ、どうなってるんでいッ！」

富三は煙管で長火鉢の縁を叩いて何度も繰り返して、そう喚わめいた。考えられないのだ。誰が誰を宥なだめられるでもなかった。やがて別人のような虚ろな眼になった富三が口を開いた。小さな声だった。

「お小夜、お花はまだ清元の稽古かい？」

「もう追っ付け帰るころじゃあるけどねえ」

「こんな酷い話があるもんか。このこたアお花には内緒だ」

「おまいさん、いつそ兄妹の名乗りをさせてやっちゃどうだろね？ お花とは添えなくてもおまいさんさえ我慢すりゃ源さんに跡目は

継がせられるだろ？」

「なにをッ。てめえには血のつながりつてもんがわからんねえのかッ。お花が源次を見る眼つきに気がつきもしなかったかッ。てめえの子じゃねえから、そんなことも判んねえってのかッ、バカ女^{あま}ッ。源公を婿にしようつてのはお花がしあわせになれてのことじゃねえかッ！」

あまりの罵られようにお小夜は啞然とした。次にお小夜を襲ってきたのはかつて知らない怒りの感情だった。

源次は俯^{うつむ}いたまま夫婦のやり取りを聞いていた。

……うつ。か、勘弁しておくんなせえ。親方ア、お内儀さん、源次めはお嬢さんとはもう夫婦どころか兄妹でもなくなっちまったんで……。源次は心のうちでのたうちまわっていた。

富三はがつくりと肩を落とした。

「源次、おめえ本当に左官になるのか？」

「……」

「銀の字んどこでも何処へでも行きな。頃合いを見てお花には俺から話しく……」

源次にはもうどうでもいいことだった。

その日、腹の虫を抑えようと富三は昼間から飲みだした。飲んでも飲んでも怒りがおさまらない酒に富三の眼が異様にすわって来た。「やだよオ、おまいさん、そんなに飲んで」

「うるせえッ。跡継ぎ一匹ひり出しもしねえくせにッ。ふざけるねい、この女つちよがッ！」

富三は徳利をお小夜めがけて投げつけた。

「ぎゃッ」

徳利の当たった眼のふちが見るみる腫れあがり、膨らみのまん中から赤い血がつつとひと筋流れ落ちた。

小夜は終わったと思った。

……この人はお花にしか見えちゃいない。忘形見のお花がいる限

り、お菊さんと生きている。それでもあたしはこの人を有難いと思
っちゃあいた。しかし、こうまで言われちゃあ。もつと早くにあた
しなんつか要らない女だと言ってくれりゃよかったのさ。おまいさ
んにはあたしなんか端っから要らなかつた。あたしだってもうおま
いさんなんか要らない。要りやしないさ、もう何もかも……。

大の字で高いびきをかき出した富三を小夜は血の氣のない顔で見
おろした。

遠くで浅草寺の暮れ六つが鳴った。

小夜は富三の道具箱から細身の鑿のみを一丁取り出した。両の膝で頭
を挟むようにして、それを力まかせに富三の喉元に突き立てた。鑿
を抜くと温かい血が噴き出した。

……どうだい、水芸だ。あっははは……。

小夜の顔は泣き笑っていた。氣が触れたのだろう。

……おまいさんがお花を可愛がればかわいがるほど、あたしやお
菊さんが憎かった。死んでるのにおまいさんを取上げやがって。そ
れも十五年だ、あたしもよくもったもんさ、あははは。いいや、あ
たしはお花を殺しやしないよ。いつしよに死なしてやるもんかね、あ
為さぬ仲の子なんかと一緒に死んでたまるもんか、あははは。女は
きれいだと言われるよりや、一言かわいいと言ってもらえるだけで
生きられるもんをさ。その一言がなくてあたしを十五年も抱いたん
だからね、間違ってたのはおまいさんさア……。

小夜は台所に子安神社のお札を一枚、一枚と十五枚並べると亭主
を刺した鑿のみで喉を突いた。小夜はためらわなかつた。お札は小夜の
血で赤くなつた。

激しい雷雨の中をずぶ濡れで大川土手を急ぐ男女がいた。女は手拭いで顔を隠しているが、時おりの稲光りに照らし出される顔はこの世のものとは思えない形相をしていた。男も女とそっくりの眼付きだった。二人は駒形の渡し辺りに来て立ち止まった。

「源次、この世の名残りに一度抱いておくれよ」

「あゝ、抱いてやるとも」

男女は泣いている。浅ましいと言われようとこと切れるまで身体の中に生きているものをどうして先に殺せよう。人間はしよせん哀しい畜生なのだろう。

「お花、いいな……」

「もう、だれもないものねえ。地獄に落ちる道中でも離れたかあないから、これでもっとしっかり結わいておくれね」

「お花、俺ア畜生になっても虫けらになってもおめえを忘れねえよ。後にも先にもおめえしか知らねえ」

「なにがどうでも今さら何でもないやね。好きになつたのが兄さんあにだったってただけだもの。どうにもならなかったんだもの。今だって好きでしようがないんだもの……」

「なら、未練はねえな」

「あい……」

富三夫婦の死後三日めのこと、大川をずっと下った寺島の渡しに男女の水死体が浮いた。二人の足首を解けることなく結んでいたのは女持ちの手拭いと男の下帯だった。

心中を禁じたのは徳川吉宗だったか。土左衛門は身内といえども引取れないし、埋葬すれば罰せられた。田原町のと大川の中ほどの伝法院の裏路地に、風雨に晒されて鼠色した一尺ほどの、五寸角の柱の切れ端が二本並んで立っている。子供の遊びのようなそれを、今は誰も見向きしないが、地元の古老の話ではこの二本の短い柱は、お上の罰を恐れて地蔵を祀まつれなかった昔の人が二体一組の地蔵に見たてたもので、兄妹地蔵と呼ばれていたという。二本柱は過って恋

に落ちた兄妹を地獄から救い出す能化^{のうけ}であるとも言つ。(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8553c/>

二本柱

2010年10月8日15時11分発行